

日光より友へ

文科一部三年 安永みち

い」などとりどりに云つた。國津館の座敷に上つて發車までゆつりやすんだ。こゝで會計の總勘定をした所も十錢づゝ徴集せねばならなくなつた。そして差引一錢残つた。明治十九年鑄造の青銅貨であつた。これは級會へ寄附して奨學資金にませうと、大切に私が保管した。ゆつくりやすんでこの旅行の樂しかつた事を追想した。「さあもう時間になりました」と女中が云ひに來たのでいつて見ると汽車の出た二分ばかりあと。實につまらない。四十分まつて五時三十分で上つた。下る人は五時四十七分、いよいよおさらばになつてしまつた。西日はひどく車窓を射てゐる。車内のはなしはそれからそれへとつゞき或は笑ひ或はおどろき或は眞面目になる、大船で辨當をつかつた。かくて先生は品川で下車遊ばす。あとには五人樂しい樂しい旅行もこゝに終をつける事になつた。かくて新橋について各々向ふ方面の電車に乗つて別れたのであつた。

中禪寺湖畔より一筆申上げ候。彼方の山々にゆきかひし雲のちぎれも見えずなりて夕暮は我が肩に背に迫り申候。山も水も我れも人も一つ色につゞまれて無限の境にある心地いたし候この間に急き筆とりて君が未見の知己を御紹介いたすべく候。

九十九折なる彼の瀧壺の道を降りていちはやく五郎平茶屋に到れば瀧は突然現れ申候。眼前數米突の空間に出現せし巨瀑は皮肉なる批評家の如く我に向ひ、驚嘆すべき哲人の眼して我を覗ひ大宗敎家の偉大なる態度もて我を迎へ申候。勢躍玉龍、響奔鐵騎、使人目眩氣奪。私はその眞相を語る語を知り申さるも此等の數句が偽に近きを知り申候。犇々と迫り來る威力に全身の血管は縮まりそこゝに輕き微けき肉の痙攣を作し申候。神秘の畫面になくてならぬ雲はこゝにも動き居り候。來迎の聖者をのする雲より

は更に命あるものにて候。此處に投せし青年に就きて吾等はよく語りしものにて候。君も我も其の頃は唯幼き狂熱の觀客にて候ひき。彼が内心生活の如何なりしか知らむとだにせざりし吾等はこの驚異すへき自然を舞臺として仕組まれし劇の華やかさにあらゆる讚辭と同情とを傾け申候ひき。こゝに至りて彼の矛盾は一致いたし候。彼の悲觀は樂觀と化し申候。彼の行くへき道は是れ唯一つにてはあらざりしむらなも二重の生活を苦痛とし「肯定にあらざれば否定」その間に一毫の間隙をも存せしめ得ざる彼の眞實は私共の最も要望する態度にて候。私共は「抵抗なく努力なく葛藤なき」なるがまゝの活き様を以ては遂に生を創造し得ざるを確信いたし候。この點より私共は彼の名か一種の代名詞となりしを悲しむ者にて候。

湖は總て懐かしきものにて候。野の湖より山の湖が更になつかしく候。こゝの湖をつゞむ山々はいま紅葉の眞盛りにて候。されど自分の目が見る程の色を表す語だに知り申さるる私は豊かなる君か畫趣をそゝりえさるるを遺憾に感じ申候

柔かき輪廓の山々はその形にふさはしき色に描かれ申候。佐保姫と云ふ名はおとなしき色調を彩雲といふ語は配色の巧妙さをかたる心地いたし候。水もコバルトに近き青にて全体の色調を助くる唯一の色かとも思はれ申候。その水の面岸近く漕がせては君が不斷の徵象の境に入る思ひに倒影の木の間をさまよひ申候。されど數時間の後私は眞の君が詩境に生くるを感じ申候。そは雨の戰場原にて候。昔山に住む神々が夜な／＼戦ひしたりと君に聞きし戰場原の雨の夕べにて候。わざ／＼上京してまで見たしといはれし上野の博覽會場内の落葉松はこの野のはてよりはてに立ちならひ黄はみし細き葉は涙の如くこぼれ居り候。樺色のなげきカフエーの勾ひ音にせはそは肉聲のふるひふるひするメロデーにてや候はむ。格好のバックを作る男体白根の山にはコントラバスの伴奏を思はせ申候。思ひ出してはふりいだす雨は半音の裝飾音にてか。要するに深みある短音階的情緒豊かにたゞよひ居り候。全く君の詩の調子にて候。自ら彼の

小曲吟さまれ申候。中禪寺湖の音楽はイ調ホ調の長音階にて候。快き協和音のコーラスにて候。それ以上何物をも見出しがたき平面美に候。皮相美に候。

御約束の白樺の皮しのばせしナイフもて試み候も思はしからず近所の茶屋にて人のよささうな姫さんより貰ひおき候。然し歌の方はあやしきものにて候。この皮をたきつけにいたし候よし氣がりの一つにて候。

むら／＼と立つた樺の細い幹か白絹のやうな柔い光澤をおびてそこらに落ち散つた葉は斑に金色に光る。

君が十八番を思ひ出さする白樺の林もこれあり候。

落ちて来る一葉のつぎにまたおちむ黄なる一葉のまたるゝ夕

この作者の心もちてみるひまもなく通りすぎしはいまものこりをしく候。

明日は日光に参り徳川三百年の歴史が私に遺しおきたる唯一の作品をみて歸京の途にのほり申

すべくこの宿も今夜限りにて候。よべきし湖の悲しき寂しき鳥のこゑ忘られず候。おみせしたきは西の戦場原
共にきゝたまは今宵のそのとりの歌。

露

文科一部二年 山中 たか

露こそは自然の母君の此の世にありとあるものをはぐくみ給ふ愛の御涙ならぬ。なさけあつき母君はひねもす己が務をよくこそはげみたれど野にも山にも草にも木にも甘き汁をいどさはおかせ給ひて其のいたつきを慰め給ふ。されば秋の夜を夜もすがらなく虫も其の御恵みによりて聲からず事なく春の日をひねもす舞ふ胡蝶も其の御なさけによりて疲るる事なく己がじじ其の務をつとめいそしむにぞありける。さては塵の世に立ち騒ぎて苦しき生をいとなむものにもまた同じう御恵みをかけさせ給ひて疲を癒し悶を慰め給ふぞありがたき。月あかき夜野邊にさまよへば千草八千草の其の恵みに潤ひ

宿りて美しく輝けるは美人の臉うるほひしに似て何をうらみ何をかこちてといとあはれにもまたいちらし。

かく數へあぐればさても盡きせぬ御恵みの深さよ。いとも尊くなつかしき自然の母君はかく春の朝も秋の夕もさては晝となく夜となく此の世にありとあるものをはぐくみ給ひてひねもすの務に疲れし身を慰め夜もすがらの悶に苦しめる心を救ひ給はんとて涙の露をおとさせ給ふにぞありける。かく自然の母君にはあつき涙を持たせ給ふを此の世の人にして若しいささかも涙なかりせば心なき岩木にことならざるべし。かくてはさらぬだにうき事多き此の世いかにわびしくつらからまし。あはれ自然の御母の此の美しの御涙我等もなぞらへて持たまほしきものにこそ。

郊遊會

文科一年 平田 いち

秋閑なる十月四日群馬縣太田に郊遊會を催され

て白妙の玉をかざし吹く風にはろほろとこぼれてあな面白しとの感起さしめ或は御空に輝ける星の影さへ宿して此處も高き雲の上かと疑はしめ或は靜かに虫の聲をふむもすぬれしむるは天の浮橋渡る心地して我が世の限りを此處にと思はしむるもかたじけなし。みづみづしき緑の木の色もゆるばかりに輝く眞紅の紅葉其の恵みに潤ひて天つ日に照りそひたるいづれめでたからぬかは。かげろふもゆる山路に咲き匂ふ葎の色を深からしめ枝もたわわに茂れる糸萩に香を合ませて置きあまるが分け行く袖にもすそにはらはらと散りかかるは我れをしたふ妹の涙にも似てなつかし言はん方なし。赤き花うばらの小さき花びらに包まれたる芥子撫子などの上におかれたるなごいとし少女子の林檎の色したる頬をつたふあつき涙の玉かあらぬかといと愛らしうて見る人にあはれをもよほさしむ。さては池の面の白蓮の青き廣葉におかれたるは尊き聖人の罪深き人の子の上を救はせ給ふとてそそぎ給ふ御涙のやうにてまことに尊し。芙蓉花に